

子どもの社会的葛藤解決行動の発達的研究

A developmental study on young children's conflict resolution at nursery

広瀬 美和 (Miwa Hirose) 指導：根ヶ山 光一

第1章：問題

本論文の目的は、保育園における自然観察から、子どもの社会的葛藤解決行動を抽出し、その現象の構造を明らかにすること、および幼児期におけるそれらの行動の発達の変化を検討することである。子どものいざこざ等の社会的な葛藤については、彼らの社会構造や社会的スキルを反映するものとして評価され、研究が盛んに行われている（たとえばStrayer & Strayer, 1976；斉藤・木下・朝生, 1986；Shantz, 1987）。その結果、社会的葛藤が子どもの社会性の発達に役立つという積極的な機能があることが示されている。その背景にあるのは、多くの子どもたちが、乳児期には主に大人側の配慮によって意図を汲み取られつつ相互作用を行い、他人との葛藤を経験することが少なかつたにもかかわらず、幼児期の仲間関係では、互いに拙いコミュニケーションスキルによって、問題のある相互交渉を経験し、葛藤を展開するようになるということがあげられる。

また、集団内の葛藤については霊長類研究においても関心を集めてきたが、近年では葛藤そのものよりも、いわゆる仲直りや和解、調停といった行動を含む、葛藤解決や、第三者個体による葛藤管理の行動に注目が移ってきている（杵掛, 2002）。それらの知見や、霊長類研究の手法はヒト幼児の研究にも応用されている。それにより、年齢とともに仲直り頻度が上昇する（Fujisawa et al., 2005）ことや、友人関係や血縁関係など社会価値が仲直り頻度に影響を与える文化と、そうでない文化があること（たとえばButovskaya & Kozintsev, 1999；Verbeek & de Waal, 2001）などがわかってきている。

しかし、これまで和解、葛藤解決行動は、葛藤後に当事者がその場に留まった場合を対象として行われてきた（たとえばHartup et al., 1988）。そのため、いったん当事者同士が離れた後の葛藤解決の生起を過小評価してしまっていた可能性がある。また、和解や仲直りは、親和的・向社会的行動として研究が行われてきた（たとえばEisenberg, 1992）。そのため、子どもの葛藤解決研究は、謝罪や話し合いやルールの導入といった行動に限定されがちであった。また、子どもが泣いたり大人が介入した場合は、その時点をもものわかれによるいざこざの終結としたり、「大人側から

の」介入として処理してきた。そのことで、それ以降に起こる子どもの行動は切り捨てられ、子どもの能動性を無視されてきたといえよう。

そこで、従来の葛藤解決行動のイメージにとらわれずに、子どもたちの集団がどのように葛藤を解決しているのかを探り、その構造を明らかにするために、保育園での自然観察を行い、新たな方略の発見を目指した。

また、本研究では、現場での観察データを文脈全体で質的に理解しようとする解釈的アプローチという立場をとっている。発達心理学においても、日常生活から抜き取り、子どもの育ちを要素還元して一義的な因果関係として分析してきたことへの反省から、この立場が再評価されている（中澤, 1997；柴山, 2006）。子どもも含めた人々をその生態学的・社会文化的な環境の中に戻して、具体的な場でリアルに捉え、複雑でダイナミックな人間の営みを理解しようとする研究法として、本研究においてもこのアプローチを採用している。

第2章：子どもの調整・仲直り行動の構造：保育園でのいざこざ場面の自然観察的検討

保育園での自然観察によって137例の葛藤エピソードが得られ、その観察データをもとに、子どもたちの仲直り方略が抽出された（Table 1）。

Table1 調整・仲直り方略の内容と生起数		
方略	内容	生起数(%)
譲歩	ことばで相手の要求を受け入れたり妥協して自分の要求をとり下げる	29 (6.8)
ルールの導入	じゃんけんや順番等のルールを導入する	8 (1.9)
謝罪	「ごめん」など、謝罪をする	13 (3.1)
説明	自分の行動の理由を説明する	22 (5.2)
代償	代わりの物やおもちゃを提供したり、撫でたりする	5 (1.2)
接近・合流	積極的に近づき、同じ遊び・作業に参加する	46 (10.8)
接近・合流の誘導	同じ遊びに参加するよう誘いかける	15 (3.5)
距離取り	場所を移動していざこざの緊張状態を回避する	10 (2.3)
抗議	「いやだ」「やめて」等の発話で不満や拒否を示す	109(25.6)
抵抗	押す、たたく等身体的に抗議する	29 (6.8)
おどけ	おどけた仕草や発話で遊びへ移行させようとする	34 (8.0)
注意の転換	他のものへ注意を促し、いざこざから注意をそらす	12 (2.8)
介入要請	大人を呼ぶ等で介入を求める、求めようとする	43 (10.1)
懇願	攻撃をやめるように懇願する	10 (2.3)
劣位性表示	開目や泣きべそ顔等を見せる。身体を引いたり姿勢を低くする	41 (9.6)
計		426(100)

そこでは、他者を巻き込んで構造を変化させたり、当事者を操作したり、あるいは距離をとって緊張状態を解消したりといった、直接相手にはたらきかけるわけではない方略も用いられていることが指摘され、当事者間の相互作用

だけに留まらないダイナミックな構造であることが示された。また、おどけやふざけといった行動で、緊張を緩和したり、いざこざの文脈を遊びに転換するなど、いざこざを終結させるだけでなく、遊びにまで発展させる方略を用いたり、あるいは劣位性をアピールして相手の攻撃を抑制したり、大人の権威を利用したりといった、順位枠組を導入して相手に圧力をかけて解決をはかるなど、親和的行動に留まらない解決方略を子どもが用いているということが報告された。

第3章：子どもの調整・仲直り行動の縦断的变化

第3章では、前述のような葛藤解決行動がどのように発達的变化をするのかについて、3年間の縦断観察によって検討された。その結果、方略の使用頻度の変化というより、子どもたちが方略の選択の際に拠りどころとする集団規範・社会的規則が変化していくことや、たとえば「心の理論 (Premack, & Woodruff, 1978)」として理解されている、相手や周囲の意図を読み取る能力の変化や、役割取得 (Flavell et al., 1968; Selman, 1971) などの能力が、子どもがいざこざを展開できるようになることや、解決する際の共感性などに反映されていることが指摘された。また、集団生活の経験を積み、集団成員の特性についての理解といった社会的カテゴリーの理解が深まることにより、子どもが自分たちの集団規範を調整していくといった発達的变化を見せることが示唆された。

第4章：幼児の社会化における身体接触の意味

第4章では、霊長類研究などにおいて、和解の儀式で用いられ、慰撫効果があると指摘される身体接触について、葛藤解決場面における意味が検討された。子どもの葛藤解決においては、ただ慰撫のためだけでなく、和解をしようとしていること、つまり自分の正当性を周囲にアピールするために用いられていることが指摘された。また、特に、レスリング遊びなどのように、そのやりとりが遊びであるのかけんかであるかがわかりにくい相互交渉の中では、相手の怒りや緊張の状態を測るなど、相手から情報を引き出すために道具的に用いられていることが指摘された。つまり、幼児の関係調整の中では、単に慰撫効果を持つに留まらず、親和性を周囲にアピールしたり相手の怒りや遊びへの志向性などを測るツールとしての意味も持つということが指摘された。

第5章：子どものおどけ・ふざけ行動と順位枠組みの葛藤解決方略への適用可能性

第5章では、第2章で抽出された方略のうち、特にこれまで葛藤解決に積極的な意味を見出されにくかった「おどけ」行動や、「介入要請」や「劣位性の表出」といった順位枠組の導入の、葛藤解決における意味が検討され、解決方略として適用しうる可能性について探索された。おどけた

りふざけたりといった行動は、幼稚園や保育園での集団保育の場面ではあまり歓迎されない行動として扱われてきた (平井・山田, 1989)。しかし、タブー語を使うなどのおどけやふざけ行動は、仲間との親和的な欲求の現れである (岡林, 1997) との指摘もある。また、タブーなどのふざけ行動に仲間との関係を調整する機能があり (堀越・無藤2000)、いざこざ場面では、タブーが、いざこざをエスカレートさせるのを回避する手段として使用されていることも報告されている (Corsaro, 1985)。さらに、堀越・最勝 (2005) は、間接的な謝罪としてふざけ行動を分類し、いざこざの解決における積極的な意味を見出している。意図的に相手をうまく笑わせることは幼児期後期にならないと難しい (友定, 1993) が、3歳より4歳の方がおどけ事例の割合が高く ($\chi^2 = 3.28$ $df = 1$ $p = .07$)、おどけなどのユーモアが成立することは、意図や「ふり」を理解するといった心の理論の成立に基づいているものであり、おどけが用いられるということも社会的な発達過程であることが推察された。

また、幼児の関係で勝敗がつけられることや上下関係が生じることはあまり歓迎されないことであったが、順位枠組が子どもたちの関係の中に導入されるということは、大人の意向 (山本, 2000) が子どもたちの中に取り込まれているということも意味している。

第6章：保育環境による保育園児の葛藤解決行動の違いに関する予備的研究

本研究で観察の対象としたのは、ある私立保育園のみであるため、その園の集団にのみいえることであるのか、保育環境や文化の違いによって、構造や発達は異なるのかについて今後検討する必要がある。そのため、その予備的研究として第6章では英国のEdinburgh市の保育園の観察を行い、今後保育環境の比較研究を行う意味が検討された。

第7章：総合論議

本研究では自然観察で得られたデータに対し、解釈的アプローチが試みられたが、総合論議では、あらためて自然場面から、子どもの示す集団規範や意図のやりとりなどの質的な変化や、大人にとって望ましいばかりではない子どもの本来の姿を読み取ろうとすることの意義が論じられた。また、本研究で指摘された子どもの行動には、従来から指摘されてきた社会的カテゴリーや社会的規則といった社会的コンピテンス (木下, 1982; Shantz, 1987; Corsaro, 1985) や、心の理論 (Premack & Woodruff, 1978; Wimmer & Perner, 1983)、あるいはメタ・コミュニケーション (Bateson, 1973)、役割取得 (Flavell et al., 1968; Selman, 1971) 等の社会的、認知的な能力が関係しており、社会的葛藤やその解決の発達とは、それらの獲得過程、発達過程であるということについて論じられた。